～interview～
川根茶の
未来を支える
若手農家

川根茶を未来につなげるために
奮闘する若手農家の今

３０代で専業農家に転職。「茶業を自分の芯にしていきたい」と話す橋本立生さん。農業に興味を持っている若い世代のために、自身が就農モデルになれればと頑張っています。川根茶を未来につないでいこうと取り組む橋本さんに話を聞きました。

時代に合わせた農業を

「農業は結果が目に見えるから楽しい」と話したのは、旧本川根地区の茶農家である橋本立生さん（小長井区）。有限会社香味園の大村代表に誘われ、30代で就農し、今年で4年目を迎えた若手農家の一人です。

橋本さんに今年の産地賞受賞について伺うと、その結果に喜びながらも「今は産地がお互いに協力して茶業を盛り上げる時代。産地賞をいかに利用するかが重要」と話します。橋本さんは中山間地の茶農家の団体組織「静岡山のお茶連合」の一員で、産地の枠を超えた、新しい視点から川根茶を残す方法を模索しています。「茶況が厳しい時代に合わせた川根茶存続の方法を探している」と心境を明かします。

自分は渡し役で構わない

また、町に若手の就農者が少ない要因の一つに、専業農家が生計を立てることが難しいことを挙げる橋本さん。「兼業をしないと生活が成り立たない。この現実が就農希望者にはつらいこと」と苦しい胸の内を語ります。ご自身も他の農作物を栽培しながら茶業を営んでいます。「自分の就農スタイルを手本に若い農家が増えてくれれば良い。いろいろな世代の人と協力して川根茶を盛り上げていくことが目標」と川根茶の未来を見据えます。

最後に橋本さんは「この町で農業をやりたいと思う人が増えてくれれば良い。そんな人たちに茶業を伝え、次世代につないでいくための渡し役になっていきたい」と期待に胸を膨らませて話しました。

受け継いだ技術や伝統を若手農家に伝える

～interview-関係者の声～

中川根営農経済事業所
横道　将 さん

高齢化によって離農者が増え、後継者となる担い手も少ないこの町では、農業の伝統や技術が継承されず廃れてしまうことが一番懸念されることです。我々農協は、茶業を残していくため、技術や伝統を確実に次代の就農希望者に伝えていかなければなりません。

また、川根茶の存続のためには、上質なお茶の生産が見込まれる茶畑を優先的に守っていき、言葉は悪いですが、生産性の低い茶園には見切りを付けることが重要です。農協としても農家の皆さんと協力しながら茶畑の管理を徹底し、新しい技術を伝え、そして、若い世代が就農したいと思えるように支援をしていきたいと思います。

学生の頃、野球部でバッテリーを組んでいたという橋本さんと横道さん。「これからの川根茶を支えていきたい」と、今度は茶業で志を共にします。

川根茶にかける「想い」
次世代につなげるために

川根茶の今に目を向ける

「農業は支えてくれる人がいないと一人ではできない仕事」「農作物は手間を掛ければ掛けただけ応えてくれる」。今回、話を聞いた農家の方は皆一様にそう笑って話しました。

確かに茶業を取り巻く状況は厳しい、茶価の低迷による農業所得の低下、それに伴う後継者不足などの課題は本町も例外ではありません。

「昔と同じかそれ以上の品質で作ったお茶の価格が最盛期の3割程度」「子供に大変な想いをさせたくないから自分の代で最後」。その様な理由から離農者が増え、この町には放棄された茶畑が目立つようになりました。「今の時代、平成初頭の頃の様な最盛期とは違います。質の良い茶畑を優先的かつ積極的に残していくことが、川根茶の存続につながる。長年、川根茶が築いてきた『高品質』というブランドを守ることが、今できることだと思います」と、横道さんは力強く話します。茶業を残していくために、尽力している関係者の努力が、川根茶の「今」を守っているのです。

川根茶の未来を見据える

町の基幹産業の一つでもある茶業は、多くの方の努力や想いがあって受け継がれてきました。「川根茶を後世に残していきたい」という茶業関係者の想いを私たちも共有していかなければいけません。また、「町が一体となって盛り上げていきたい」という想いは川根茶を「守って欲しい」よりも「守りたい」という強い気持ちが現れているのだと感じました。

川根茶が再び「日本一」という称号を獲得した今、私たちが次の世代につないでいくためには具体的に何ができるのでしょうか。川根茶の今を見つめ直し、未来について考えてみませんか。

特集「想い」守り継がれる茶業

終わり